

小規模校における協働的な学びの充実を図る遠隔授業の在り方

—複数校をつないだ授業配信の実践を通して—

企画開発室	檜垣賢一	山下太志	赤松大輔
	藤内大介	林大樹	
協力学校	弓削高等学校	今治北高等学校大三島分校	
	松山北高等学校中島分校	内子高等学校小田分校	
研究協力者	北条高等学校教諭	曾我部拓	神野定樹
		小笠原龍太	新海孝則

1 研究の目的

県立学校の小規模校においては、教員の配置状況により、科目の選択履修や、習熟度別の授業の開講が難しい。また、少人数のため、多様な意見に触れる機会や学び合いの機会が少ないことが課題である。そこで、遠隔授業の実践を積み重ね、効果的な指導法を確立するとともに、複数校をつないだ授業配信を通して、協働的な学びの充実を図り、本県が抱える教育課題の解決を目指した。

2 研究の内容

(1) 1年次の研究

ア 遠隔授業の実践状況と実態把握

延べ16校の学校を対象に、数学科・理科（物理）・情報科の授業を、計53回実施した。受信側の生徒・教員を対象に、ヒアリング調査を実施し、生徒からは、「授業形式が新鮮で楽しい」「授業内容が分かりやすい」という意見が多くあった。一方で、教員の意見からは、授業準備への負担や音声の聞き取りに課題があることが明らかとなった。

イ 1年次の成果と課題

成果は、配信側の教員と受信側の教員が連携しながら授業を積み重ねることで、生徒一人一人に合った声掛けができるようになり、理解度に応じた授業展開につながったことである。課題としては、遠隔授業を積み重ねるにつれて、当初の新鮮な気持ちが薄れ、緊張感が低下したことが挙げられる。また、少人数で授業を進めているため、多様な意見に触れる機会や学び合いの機会が少なく、遠隔授業においても、協働的な学びを取り入れる工夫が必要であることが分かった。

(2) 2年次の研究

ア 協働的な学びの充実を図る教科・科目充実型遠隔授業の実践

情報Ⅰの授業において、ピクトグラムを作成を行った。生徒が活動している場面においては、T1が話し合う論点を明確にし、T2は積極的に机間指導を行い、生徒の活動を見取ることに重点を置くなど、二人の教員が連携して生徒の活動をファシリテートすることを意識した。

イ 複数校をつないだ遠隔合同授業の実践

数学科と地理歴史科の授業において、複数校をつないだ遠隔合同授業を合わせて3回実施した。連携先の教員と打合せを効率的に行うため、「愛顔(えがお)つながるシート」を開発した。授業展開や指導方法を共有し、T1とT2の役割を明確にすることで、生徒の活発な意見交換につながった。生徒たちは、多様な意見に触れ、集中して取り組んでいる様子であった。また、教員側からは、効果的な発問や主体的・対話的で深い学びを意識している様子が見え、授業デザインを見直し、生徒をファシリテートしようとする姿勢が見られた。

3 研究のまとめ

遠隔授業において、学び合いの時間を確保し、さらに複数校をつないだ遠隔合同授業を行うことで、協働的な学びの充実を図ることができた。また、T1とT2の「授業設計に対する意識向上」と「ファシリテートに対する意識向上」の両方が同時に達成されることが、遠隔授業における協働的な学びの充実に向けて重要であることが明らかになった。